



伝統技術が評価され 世界でたなびく 印染めの大漁旗

亀崎染工有限公司



亀崎染工有限公司
代表取締役
かめざき まさひろ
亀崎 昌大氏

1972年11月生まれ。いちき串木野市出身。印染めとデザイナーとのコラボにより生まれた「祝の印」などのブランドで、受け継いだ技術を新しいカタチへと進化させている。

明

治2年の創業から、漁船の「大漁旗」や端午の節句に飾られる「武者のぼり」などを、製造してきた亀崎染工。熟練の職人が、のりを使って文字や模様を輪郭を描き、着色後にのりを洗い流す工程によって、白い輪郭が際立ち視認性を高める「印染め」と呼ばれる技法を受け継いでいる。

しかし、機械化などにより、大きく変わりつつある染めの業界。日本各地にいた職人や同業者も減少の一途。この時代に5代目の亀崎昌大社長が注目したのが海外だった。

「世界中に漁船はあるけれど、大漁旗の文化が根付いているのは日本だけ。いずれ地中海に大漁旗をなびかせた



あずま袋が展示販売され好評を得ている。世界で評価を高めつつある日本の伝統技術が、評価の逆輸入という形で動き出そうとしている。きつと海外の港にたなびく大漁旗のニュースを見る日もそう遠くないはずだ。

い」。その想いはただの絵空事ではなく、フランスで行われた日本文化を発信するイベントに参加したことで強くなった。大漁旗を飾り、印染めのワークショップを設けた時に、伝統的な技術に価値を見出す暮らし方をする欧米の人が、興味を示している様子を間近に感じた。

現在、優れたクールジャパン商品を取り扱うパリのショールーム「メゾン・ワ」では、印染めで作ったあずま袋が展示販売され好評を得ている。世界で評価を高めつつある日本の伝統技術が、評価の逆輸入という形で動き出そうとしている。きつと海外の港にたなびく大漁旗のニュースを見る日もそう遠くないはずだ。

鹿児島銘菓に灯る 新たな魅力に 熱視線

有限会社 森三



有限会社 森三
専務取締役
あわが のり
有川 尚徳氏

昭和53年3月14日生まれ。霧島市出身。仕事に興味という有川さん。「菓子店の一大イベントの一つ、ホワイトデーが誕生日なので、毎年慌ただしく年を重ねています」。

甘

い香りに誘われ、たどり着いたのは、大きなイチゴのオブジェが印象的な、菓子店「森三」。創業110年を迎える同店のイチゴロールやどら焼きといった和洋菓子の数々は、今や不動の人気を誇る。

県内8店舗の管理と製造責任者を兼任する、有川尚徳さん。前身の和菓子店「有川菓子舗」から屋号を「森三」に変え引き継いだ、叔父様とお父様のもと、菓子作りをすくそばに感じながら育った。20代前半に、丁稚奉公として千葉県の和菓子屋へ修業に出た際、和菓子作りの奥深さや楽しさを知り、家業を継ぐ決意を固めたという。



今や店で販売する和菓

子のほとんどを企画する有川さん。その中の一つ「英邁島津公」は、かるかんの中にジューシーな果実を入れた斬新なアイデアで、これまでのかるかんの常識を覆した。「果実の水分をいかに生地と融合させるかに、とても時間を要しました」。同商品は「2018かごしまの新特産品コンクール」において、鹿児島県特産品協会理事長賞を受賞。「失敗さえも楽しめたからこそ完成したと思いますし、トント

ン拍子で完成していたら、賞も取れていなかったかもしれませぬ」。

どんな時代でもどの人にも合うお菓子を提供し続けるーその思いを胸に、今日も有川さんの新たな菓子作りの挑戦が始まる。